

堂雜話

初編

完

×

---

i 106

---





法... 序... 文... 多... 國... 公... 醫...  
 是... 也... 有... 於... 主... 之... 以... 換... 序...  
 之... 今... 之... 三... 序... 醫... 之... 仲... 友...  
 之... 千... 路... 乃... 博... 中...  
 路... 博... 乃... 幸... 一... 也...  
 三... 刻...  
 三... 刻...

醫聖堂雜話 初編

南越 篠島宗恕道忠父述

男 宗英道伯 校

夫醫ノ道ヲ學ブテ實ニ難シトス予不幸ニシテ  
 早ク孤トナリ十有二ニシテ東都ニ赴ムキ叔父  
 牛南雨森翁ニ就テ學ブテ十又餘年ナリ翁許シ  
 歸郷シテ父祖累代ノ家業ヲ襲テ今年壬辰二十  
 又六春齡既ニ五十二至レド素ヨリ淺學不才ニ  
 シテ未ダ黃岐張氏ノ奧ヲ窮ムルヲ能ハズ僅カ  
 ニ四十餘年ノ非ヲ知ツテ自カラ慚ル所ナリ故

醫書目録  
二初學ノ者ハ先ヅ善師ヲ擇ンテ四書五經ヲ習  
ヒ文字ニ通ジテ義理ヲ明ラメ黃岐張氏ノ堂ニ  
上ル階梯トスベシ餘カアラバ史漢左國ヲ讀ム  
モ可ナリ讀マザルモ亦可ナリ餘リ儒學ニ深入  
セ又ガヨシ東坡ガ書ヲ讀ムハ山ニ上ルガ如ク  
淺深皆味ハヒアリト云シ如ク次第ニ味ハヒア  
リテ漸々ニ面白ク成リ儒學ノ方ガ主ニ成リ肝  
心ノ醫學ノ方ガ客ト成ルモノゾ儲又詩文ニテ  
モ作り覺ユルト自然ト其方ニ實ガ入り常ニ新  
意ヲ吐シト不斷工夫シテ事々物々ニ心ヲ奪ハ

レ愈ヨ本業ノ方ガ鹿畧ニ成ルナリ其詩文ニ平  
夫シテ費ヤス隙ヲ醫按ニ用ヒテ骨ガ折タキモ  
ノナリ又儒學モ偏屈ニ陷ルト字義文法ガ力  
ヲ穿鑿スル様ニ成リ却ツテ醫學ノ本意ヲ取違  
ヒ治療ノ道ヲ失フ様ニ成ルモノナリ譬へハ倭  
俗ハ鮭ヲ以テ鱈魚トシ鮭ヲ以テ鱈魚トシ鱈鼠  
ヲ以テ土龍ト為ル類多シ然ルヲ強テ鮭ハ河豚  
魚ナリ鮭ハ鱈魚ナリ土龍ハ蚯蚓ナリト為ル大  
ニ誤リ矣又此ニ笑談アリ或老儒醫ニ藥  
品ヲ撰用スル本草ニ無毒トアルバ喜ンテ用ヒ

有毒トアレバ恐レテ用ヒザル人アリシガ常ニ  
 甘温ノ藥ヲ貴ンデ深ク參ヲ信仰シテ生涯苦  
 寒ノ品ヲ避ルル仇讐ノ如ク已ラ得ズシテ  
 連ヲ用ユル寸ハ必炒テ使ヲ予ハ是ニ反セリ故  
 ニ彼ガ預リ治セ又病人ヲ療ジテ毎度人ノ心目  
 ヲ駭カセシマ多シ是故ニ初學ノ者ハ餘リ儒學  
 ニ深入セズト本業ノ醫學ニ心ヲ盡シタキモノ  
 ナリ醫者カ下句一章チラズ恥ナラズ醫ノ道  
 ヲ知ラザルハ耻ナリ予モ書生タリ寸ハ僅カ  
 ニ儒書ノ端ヲモ見聞シテ詩文モ少シハ作り北

山山本翁ノ孝經樓ニモ登リ詩佛大窪氏ノ詩聖  
 堂ニモ會シ書畫閑遊ノ席ニ到ラサルハ無ク大  
 儒及ビ諸名家ト同遊シテ從來ノ詩藁モ多カリ  
 シニ先年壬午春祝融回祿ノ災ニ罹リテ悉ク烏  
 有トナル其ヨリ遂ニ念ヲ絶テ詩ヲ作ルコト廢  
 ス早ク今日ノ悔アルヲ知シテ詩料ヲ捨テ、醫  
 事ニ求バ四十餘年ノ非ハ二十餘年ノ非ナルベ  
 シ臍ヲ噬ニ至ル

○牛南翁ハ晩年ニ及テ初メテ  
 台命ヲ奉ジテ謁見ノ列ニ入りシ人ニテ醫ニハ

深ク心ヲ用ヒテ骨ヲ折ラレシナリ發明ノ書モ  
 多ケレモ松蔭醫談ノミ今上未シテ世ニ行ハル  
 予ガ歸郷ニ臨ンデ翁笑テ曰ク汝ニ餓アリ越前  
 ノ國ハ一向宗門ノ徒多シ若シ治ヲ誤ツテ人ヲ  
 殺スモ過去ノ約束ナリト為シト是戯言ニ似テ  
 實ニ予ヲ誡ムルノ深切ナリ此言ヲ以テモ翁ノ  
 常ニ治療ニ心ヲ用ヒ骨ヲ折ラレシヲ察シ知ル  
 ベシ夫醫ハ仁術ナリ故ニ今日何モ知ラヌ文盲  
 ニテモ醫者ト云フ名聞アレバ鍼藥ニテ人ヲ殺  
 シテモ終ニ解死人ニ出タルヲ聞カズ實ニ難

有家業ナリ其難有モノハ仁術ヲ行フ者ノ真似  
 ヲ為レバナリ苟クモ本業ヲ務ムル者ハ天道ニ  
 順ヒ仁恕ヲ以テ毎ニ病客ニ對シ貴賤貧富ノ差  
 別ナク人身ノ病苦ヲ我身ニ引當テテ治療ヲ施  
 スベシ譬ヘバ我身ノ病苦ヲ他醫ニ委テ治療ヲ  
 請フニ彼若シ我貧賤ナルヲ知ツテ侮リ輕診シ  
 テ良藥ヲ與ヘザル時ノ意何如之是故ニ彼ヲ察  
 シ已ヲ省ミテ仁ニ違フト無キハ真ノ醫ナリ今  
 ノ醫ヲ觀ルニ都鄙共ニ多ク已ガ口腹ヲ養フ本  
 トシテ方術ニ心ヲ盡シ人ヲ救フトヲ思ハズ大

ニ門戸ヲ張テ時勢ヲ飾リ衣服大小ヲ華美ニ仕  
 立テ駕ニ乗り出タル處ハ天晴レ良醫ニ見ユレ  
 デ巧言令色ヲ專トシテ利欲ニ走り權豪ノ家ニ  
 入ツテハ致々汲々トシテ勤メ或ハ己ガ職ヲ忘  
 レテ金銀嫁娶ノ仲媒ヲ事トシ或ハ歌舞シテ玩  
 弄子ノ如ク或ハ茶湯誹偕連歌碁將碁ニ心ヲ奪  
 ハレテ人ノ死モ顧ミズ或ハ人ノ病苦ヲ己ガ飼  
 猫ノ煩フ程ニモ思ハヌ文盲醫ガ深切ラシク微  
 恙ノ病家ヘモ度々見廻リ諂諛ヲ以テ人ヲ欺ム  
 キ紫蘓厚朴陳皮茯苓活等ノ如キ藥劑ヲ天道

次第ニ何病ニモ與ヘテ彼ガ秘傳ノ追從輕薄散  
 ナ云フ妙方ヲ兼用スルガ故ニ時ニ遇ヒ行ハレ  
 勢ニ乗ジテ我意ヲ擅ニシ却ツテ良工ヲ讒害シ  
 自カラ尊大ニシテ羞ヂズ太醫顔シテ太甚無禮  
 ナル輩多シ吾門此等ノ徒ヲ蝥醫ト名ツク憎ム  
 ベキニ非ズヤ愚夫愚婦ハ彼ガ追從輕薄散ノ為  
 メニ飽マデ欺ムカレ父母妻子ノ病ヲ委置テ微  
 邪ノ漸々ニ深く膏肓ニ入ルニ及ンデ俄ニ人ヲ  
 馳テ他醫ヲ集メ治療ヲ請フト雖モ終ニ救フベ  
 カラザルニ至ル然レモ彼ノ蝥醫モ病家モ猶悟

ラズ或ハ天命ナリトシ或ハ過去ノ約束ナリト  
 ス歎ズベキニ非ズヤ程伊川曰病卧於床委之庸  
 醫比之不慈不孝事親者亦不可不知醫トハ此ノ  
 謂ナリ其身醫道ヲ知ラザル者ハ常ニ醫者ノ巧  
 拙ヲ能考ヘ識ツテ孝慈ノ道ニ闕ガル様ニ為ベ  
 シ若シ其容貌ト口佞トヲ以テセバ大ニ誤リア  
 ラシ人ヲ束ブコトハ實ニ難シトス凡テ諸藝ニ達  
 シ道ニ志ザス者ハ飾ヲ屈シテ人ニ阿ラザル故  
 ニ世ノ交リハ太甚疎ク輕薄子ノ如ク行ハレ又  
 者ナリ東方朔云抗之則在青雲之上抑之則在深

淵之下用之則為虎不用則為鼠ト今日人モ用ヒ  
 ラルレバ小人モ虎ノ勢ヒアリテ賢者ノ如クニ  
 見ヘ君子モ用ヒラレザレバ鼠ノ拙キニ似テ愚  
 人ノ如クニ見ユルナリ百里奚モ虞ノ國ニ在リ  
 シ時ハ愚人ノ様ナレト秦ノ國ニテハ智者ナリ  
 俄ニ智愚ト變ズルニ非ズ元ヨリ賢者ナレト用  
 ヒラルト用ヒラレザルトニ在リ越人モ三々  
 ビ齊侯ノ色ヲ望ミテ未病ヲ察スレト信ゼラレ  
 スシテ去ル人ノ知ルト知ラザルト時ニ遇フト  
 遇ハザルトハ皆是天ニシテ古今同シ良醫良將

モ信用セラレザレバ鼠輩ニ異ナラズ故ニ良醫ト雖モ執ヒ蝥醫ノ後ヘニ在ルアラン具眼ノ士ニアラズンバ人ヲ識ルヲ能ハズ青盲ノ俗ハ下和ガ玉モ砂礫ト一同ニ心得テ却ツテ高操ノ君子ヲ嫌疑シテ諂諛ノ小人ヲ信仰シ百年ノ天壽ヲ非命ニ誤ル者多シ

○今ノ醫學者流ヲ見聞スルニ漸ク下年カニ年バカリモ郷里ヲ離レテ先生家ニ從ヒ僅カ講釋ニテモ聽ト療治ハ早出來ルモノト心得テ未ダ其先生ノ主意ヲモ理會セズシテ歸來リ何某ニ

學シテ我ハ古醫方家ナリ我ハ後世醫家ナリト自稱シテ古方家ハ攻撃ヲ專トシテ補劑ヲ捨テテ用ヒズ人死スレバ論語ヲ引テ子夏曰死生有命ト命ハ我が知ル所ニ非ズト彼ガ口實ナリ後世家ハ補益ヲ專トシテ擊劑ヲ恐レテ用ヒズ人死スレバ人參モ何程マデ用ヒタルニ應ゼザルハ能ク々ノ虛症ナリト云テ終ニ悟ラズ此人參ノ却ツテ人ヲ殺スヲ擊劑ヨリモ太甚シキトアルヲ知ラザレバナリ故ニ愈投シテ愈誤ル者多シ

東坡ガ書ヲ學ベバ紙ヲ費ヤシ醫ヲ學ベバ人ヲ

費ヤスト云レ如ク假令今日十人ヲ費ヤス凡其  
非ヲ知ツテ後ニ百人ヲ起サバ可ナリ百人ヲ費  
ヤセ凡其非ヲ省ミズレテ天命ニ歸スル者ハ與  
ニ醫ヲ談ズベカラズ世ニハ人ヲ多ク殺サ子バ  
免角上手ニハ成ラレヌト實ニ心得居ル者アル  
ニヤ我ハ何十人ハ殺セ凡未ダ百人ニハ滿タズ  
杯ト手柄話ニスルヲ聞ケリ苦々シキコトニ非ズ  
ヤ由是思フニ天下ノ病人ヲ四分ニシテ一分ハ  
藥セズレテ瘥ヘ一分ハ藥スレ凡治セズ一分ハ  
醫ノ手ニ起キ一分ハ醫ノ手ニ斃ルベシ慎マズ

シバアルベカラズ夫醫ノ道ハ中庸ニシテ偏ラ  
ズ人ヲ救フヲ以テ本計ス故ニ吾門ニ於テハ古  
今ノ方法ヲ撰用シテ汗ヌベキハ汗を吐ヌベキ  
ハ吐シ下ヌベキハ下シ補フベキハ補フテ其症  
ノ宜キニ隨フ何ゾ古今醫ノ名ヲ分クシ文政年  
中ノ人ヲ療ズル者ハ文政醫ナリ天保年中ノ人  
ヲ治スル者ハ天保醫ナリ文政醫ヨリ天保醫ハ  
後世ニシテ文政醫ヨリモ亦自カラ發明スルコ  
トアラシク中古ノ先哲達モ古方ノ法ヲ今一層力  
タル所アルガ故ニ補益ノ方ヲ發明シテ建立セ

ラレシナリ古方ヲ捨テ、用ヒザルニ非ズ然ル  
ニ我ハ古方家ナリトテ陽氣下陷ノ症ニ補中益  
氣湯ヲ捨テ、桂枝湯ヤ四逆湯ノ方ヲ處シテ何  
ノ益カアラシ我ハ後世家ナリトテ邪熱胃實ノ  
症ニ承氣湯ヲ恐レテ平胃散ヤ不換金ノ方ヲ投  
ジテ亦何ノ益カアラシ故ニ中庸ヲ能スルニア  
ラザレバ醫ト稱シ難シ  
○賀川子玄子ハ産科ニ名ヲ得テ一家ヲ興シ其  
餘流大ニ世ニ行ハレ横矢ノ死ヲ免カル者多  
シ予モ其道ヲ學シテ略其術ヲ窮ムト雖能敢テ

妄リニ手ヲ下サズ然ルニ近來ハ按腹ノ術ニモ  
熟セヌ者が僅カ口傳ノ云ヲ聞テ我ハ賀川流ヲ  
學ビ産科ナリト言ハヤシ世俗ヲ欺ムク輩多シ  
常ニ産家ニ入ツテ穩婆ト共ニ産ノ難易ヲ論ゼ  
ズ妄リニカヲ極メテ頻リニ腹ヲ推下ケ無理ニ  
婉セシムルヲ見聞ス是察スルニ其自然ヲ待テ  
居テハ旁人ノ下手ヲシク思ハシトテ慮ハカリ  
己ガ骨折リ手柄ヲニテ生マシタリ顔セン為メ  
ノ結構ナリ實ニ賀川家ノ贅賊ニシテ憎ムベキ  
ノ太甚シキナリ不仁是ヨリ大ナルハ無シ然ル

ヲ白痴ノ俗ハ左ナケレバ生マレヌモノゾト心得テ我モ人モト彼が不仁ノ術ヲ信ズルモ笑止ナリ夫産ハ天地自然ノ物ニシテ病ニ非ズト云フコトヲ合點スベシ懷胎シテ十月メニ子ノ生マ  
ルハ譬ヘバ瓜菓ノ秋ニ至リテ熟シ自カラ落  
ルト同シコトナリ子女子モ其生也彼之時也ト云  
ヘリ又臨月ニ成リシ婦人ノ時氣ニ感ジテ少シ  
腰腹ニテモ痛ムト早是ハ産ニ成ルト譟キ立テ  
知レモセヌコトヲ知ツタ顔シテ其日ノ夕時ヲ數  
ヘ何時ニハ生マレル杯ト妄言シ其時刻ニ至レ

醫聖堂雜言

不効

并ニ新編

バ強テカ息サスレバ未ダ其時ニ至ラザレバ生  
マレズ彼是ト時日ノ移ル内ニ産婦ハ勞倦シテ  
後ニハ元氣モ憊レ動モスレバ非命ニ斃ルアリ  
是故ニ聖草不可太早ノ誠メアリ醫者ハ己ガ言  
ノ當ラザルハ耻ナリトシテ頻リニ催生ノ藥ヲ  
與ヘテ共ニカ息ヲ為シテ無理ニ推下ク分娩セ  
シムルニ因テ正産モ或ハ難産トナリ生子モ死  
胎ナラザレバ虛弱ナラシ産母ハ勉メテカ息セ  
シ故ニ心氣自カラ疲勞シテ或ハ血暈シ或ハ癩  
ヲ發シテ斃レザレバ遂ニ諸症ヲ生シテ終身ノ

醫聖堂雜言

刀編

十の重徳園藏

病トナル者多シ夫レ瓜菓ノ未ダ能熟セザル先  
ニ無理ニ摘取レバ其味ハヒモ薄ク蔓モ亦傷ム  
ニ同ジ又痛マシキハ死胎ニテモアラザルヲ鈎  
ヲ用ヒテ牽キ出セシヲ聞ケリ皆是發醫ノ我慢ニ  
因ルナリ僅カ己ガ名利ヲ求メテ口腹ヲ安ク養  
ハシ為メニ人ノ百年ノ天壽ヲ非命ニ斃スヲ憎  
ムベキノ太甚シキニ非ズヤ山家田舎ノ人ハ自  
然ニ其時ノ至ルヲ待テ生マル、故ニ生子モ壯  
健ナリ産母ハ二十七日ヲ待タズ甲島ニ出テ、耕  
耨スト難産モ偶ハアレデ妊娠ノ内ニ重キヲ負

テ努力スルカ或ハ顛仆スルカニ非ザルバアル  
コトヲ聞カズ又難夫ノ難産シテ死シタルヲ見聞  
セズ是産ハ天地自然ノ物ニシテ病ニアラザル  
所以ナリ然レモ難産ノ無キヲ能ハズ其時ニ臨  
シテハ賀川子ノ手術ニアラザレバ人ヲ救フ下  
難シ學バズレバアルベカラズ

◎近年ハ蘭學世上ニ同ニ流行ス外科ノ道ニ於  
テハ實ニ理ヲ窮メ捷徑ノ療具等アリ就中カテ  
イテルズボイ十杯ハ急ヲ救フ妙器ナリ又種々  
ノ方藥アリテ世俗ハ蘭藥蘭方ト云ヘバ實ニ死

七元者モ直ニ活ル程ノ結構ナル物ノ様ニ思フ  
 テ珍重スル故ニ彼ノ醫ノ徒ハ幸ニ何デモ無  
 キ物ニ蘭語ヲ呼テ利ヲ貪ル者多シ故ニ吾門ニ  
 於テハ中華聖賢ノ方法ヲ取用シテ足レリトス  
 何ゾ遠ク蠻夷ノ方藥ヲ假ツテ我神孫ノ病ヲ治  
 スルコトヲ爲シ道ハ邇キニ在リ遠キニ求ムベカ  
 ラズ然ルニ今ハ醫俗共ニ本ヲ忘レ末ヲ計リ迄  
 キヲ賤シメ速キヲ貴ブ輕薄子ノ多ク凡テ新  
 奇ヲ好ム人情ナルゾ愚カナル故ニ當時ハ金瘡  
 產婦諸血症ニハ都鄙共ニ彼ヲラシ無ケレバ

叶ハヌ様ニ覺ヘ勞熱ニハ寒キ水腫小便不  
 利ニハオオクキリ小兒痘瘡及ビ一切諸惡  
 瘡ヲ内托スルニハテリカ其外ニ數十品ヲ  
 リト雖モ下々枚舉スルニ遑ラズ吾門ニテハ  
 余瘡產婦諸血症ヲ治スルヤ童便製ノ紅花サヲ  
 ラシニ優レリ勞熱ニハ秦艸何ゾキナキナニ讓  
 ラレ水腫小便不利ニハ大戟甘遂ノ功オオクカ  
 レキリ等ノ及ブ所ニアラズ小兒痘瘡及ビ一切  
 諸惡瘡ヲ内托スルニハ酒製ノ友鼻テリアトカ  
 ヲリモ速カナリ何ゾ遠ク蠻夷ノ方藥ヲ假ルコト

又為之... 陰陽家ノ書ニ各家ノ八方ニ吉凶神ノ常ニ在  
 マシテ年月時日ニ巡行スルアリ又各身ノ八宅  
 ト號シ男女ノ生年ニ依テ伏位延歲生氣絕命禍  
 害天醫六殺五鬼ノ八門ヲ立テ八卦ニ分テ八方  
 ニ配シ一生其身ノ吉凶定方位ト為スアリ其吉  
 方位ニ向ツテ事ヲ舉ル寸ハ吉ニシテ福ヒアリ  
 其凶方位ニ向ツテ事ヲ起ス寸ハ凶ニシテ禍ヒ  
 アリト云フ然ラバ市町ノ西北乾ノ端ニ家居シ  
 テ病人ノ方位若シ東南巽ノ方ハ悉ク凶方ニ當

リ西北乾ノ方ハ皆吉方ナレバ山海ニシテ醫藥  
 ヲ求ムル所トキ寸ハ何如セシ手ヲ束子テ死ヲ  
 守ラシヤ倉公曰信巫不信醫死不治也トハ此ノ  
 謂ナリ予常ニ試ムルニ病客ノ伏位延歲生氣天  
 醫ノ四吉方ト其家ノ吉方トニ向ツテ來リ治ヲ  
 請フニ却ツテ治セズ其絕命禍害六殺五鬼ノ四  
 凶方ト其家ノ凶方トニ當ル方ヨリ予向ヒ往テ  
 死ヲ起シ生ヲ回ス丁多シト概ニ拘泥スベカラ  
 ズ五雜俎云西家之東即東家之西此ト言足以破  
 大歲之謬矣紂以甲子亡武王以甲子興此ト言足

以破陰陽之忌矣ト此言ヤ理アルニ似クレモ亦  
 深ク信用シテ妄リニ破却シ彼ガ怒リニ逢フ  
 勿レ伊陟曰妖不勝徳ト其唯徳ヲ慎レムベシ  
 古來ヨリ扁鵲倉公ヲ神醫トリト稱ス彼ノ醫  
 醫ノ徒ハ聞怖シテ凡人ノ及ブ所ニ非ズト言テ  
 自カラ晝ルハ太甚拙カラズヤ史記ノ傳云非能  
 生死人也此自當生者越人能使之起耳ト實ニ死  
 セル人ヲ生カセシナラバ神醫トシ我及バズト  
 為ルモ可ナリ予何ゾ扁倉ヲ懼レン昔シ東都ニ  
 在テ少カリシ時ニ或侯ノ步卒ニ何某ト云モノ

二十四五歳ナリシガ勤番シテ其邸ニ在リ一日  
 中暑シテ予ヲ迎ヘ他出シテ漸ク日晡ニ歸リ  
 彼邸ニ到レバ既ニ死セリトシテ枕頭ニ香花ヲ  
 設ケ又予思フ所アツテ先ヅ香花ヲ取除サセテ  
 診ズルニ六脉已ニ絶シテ一身皆冷心下僅カニ  
 温カニシテ生靈氣猶在ルガ如シ因テ試ニ一  
 鍼ヲ下スニ中脘ヨリ神闕丹田ニ至ルマデ手下  
 ニ氣アツテ上下スルヲ覺ユ故ニ藥籠中ヨリ  
 三物備急圓一錢バカリヲ取出シ温酒ニ調ヘ口  
 鼻ヨリ灌下シ病人ニ諭與シテ酉ノ下刻マデニ

吐下セバ活クベシト云テ歸リ又果シテ其夜初  
 更ニ大ニ吐下シテ蘇生セリト急ヲ告ク予往テ  
 診ズルニ一身悉ク温カニシテ六脉俱ニ復シ病  
 人自カラ坐シテ活命ノ恩ヲ謝ス調理ノ藥ヲ與  
 フルヲ十餘日ニシテ平愈セリ此亦死セルヲ生  
 カセシニ非ズ自カラ當ニ生クベキ者ヲ起タセ  
 シナリ又或侯ノ藩中ニ何某ト云ヘル者ノ一男  
 児五六歳ナルガ享和癸亥ノ冬十月ノ末ニ麻疹  
 後數月アツテ一日食癩ヲ發シ衆醫療ズレバ治  
 セズ故ニ遠ク我牛南翁ヲ迎ヘテ治セリトヲ請

フ予ハ其頃眼科ヲ學ンデ五禽齋杉村翁ノ家ニ  
 在ツテ其日幸ニ牛南翁ノ安否ヲ訪來テ側ニ侍  
 坐セリ翁ノ曰ク汝ガ歸路ニ近シ往テ代診シテ  
 方書ヲ遺レト予唯シテ去ル其家ニ到レバ老醫  
 三四輩皆圍藥シテ坐ス入ツテ禮ヲ施スニ一同  
 ニ予ガ弱冠ニシテ履服セルヲ侮リ睥睨シテ其  
 言ヤ太甚驕レリ舉家モ亦望ヲ失ナヘル聲色自  
 カラ見ハル予時ニ年二十一ナリ怒氣裂ガ如ク  
 ナルヲ押ヘテ病床ニ到リ着レバ數人涙ヲ含ミ  
 テ兒ヲ圍ミ坐ス何時ニ發セシト問フニ平且ニ

發レテ今ニ至ルマデ四時餘ナリト答フ就テ診  
 ズルニ脈沈數ニシテ胃氣猶存シ頭面ノ汗ハ珠  
 ノ如ク痰喘潮盛シテ咽中鋸ヲ引ガ如シ目睛上  
 視シテ四肢厥逆シ胸腹自カラ實シ臍傍ヲ按セ  
 バ眉ヲ顰メテ痛ヲ知ルニ似タリ故ニ心ニ生意  
 アルヲ察シテ大ニ喜ビ起ツテ衆醫ニ向テ曰ク  
 此兒死セズ猶救フベシ今ノ主方何如ト問フ  
 ニ上席ニ在リシ老醫ノ云フ皆手段盡テ今マ熊  
 參丸ヲ用ヒテ湯藥ヲ處セズ雨森公ノ來臨ヲ遲  
 ツ所ナリト予ガ憤リ猶止マズ大言ヲ放ツテ公

等皆醫ナラズヤ何ダ手ヲ束子テ當ニ生クベキ  
 者ノ斃ルハヲ待ツニヤ斯ル病人ニ亦何ゾ我翁  
 ノ手ヲ勞スルコトヲ為シ予誓ツテ起タシメシト  
 懷中ヨリ千金紫丸四五分バカリヲ出シ白湯ニ  
 テ送り下シ更ニ方書ヲ記シテ調藥ヲ雨森氏一  
 乞ハシメ其父ニ謂テ曰ク此夜ニ更マデニ必吐  
 下シテ関クベシ後此湯液ヲ與ヘテ調理スベシ  
 若シ急アラバ人ヲ杉村氏マデ馳スベシト諭シ  
 歸リ又其夜果シテニ更ニ吐下シテ甲生スト早  
 朝ニ使者ヲ來シテ再診ヲ請フ故ニ予往テ省レ

バ病兒ハ粥ヲ啜ツテ床上ニ坐ス舉家ノ歎饗ハ  
 昨夕ニ殊ナリ皆一同ニ活命ノ恩ヲ謝シ予ガ明  
 察ヲ感じテ翁ノ徳ヲ稱スルニ及ボス彼ノ贅醫  
 ノ徒ハ後世予ヲ以テ神醫ナリト為シカ笑フベ  
 シ  
 ○傷寒論ヲ讀ムニ五行六經後人攙入等ノ取捨  
 モトヨリ諸說多シ吾門ニ於テハ五行ハ捨テ、  
 取テズ六經ニ至ツテハ畢竟病毒ノ位シテ在ル  
 所ノ名トス譬ヘバ伊呂波ヲ以テ部ヲ分チ見出  
 シ易キ爲メノ名トスルニ同ジ又後人攙入モ治

療ニ益アル所ハ取用シ正文ト雖モ捨ル所アラ  
 シカ各其見ニ據ルノミ予別ニ傷寒論刪定ヲ作  
 ル儲初學ノ者ハ吉益東洞子ノ藥徵ヲ熟覽スベ  
 シ仲景ノ方意ヲ解スル此書ニアラズンハ早ク  
 明ラメ難シ東洞子ノ骨折ト云ハ唯是藥徵ニ止  
 ム然レモ自己ノ見識ヲ主張シテ僻說多シ取捨  
 シテ一概ニ信用スベカラズ凡テ書ヲ讀ムニ心  
 得アリ其言ヲ真ニナサント欲シテ却ツテ潤色  
 多ク又彼ニハ是トスレモ此ニハ非トスルアリ  
 撰用セズンバアルベカラズ孟子曰盡信書不如

醫聖堂雜言

和紙

一ノ二ノ三ノ四ノ五ノ六ノ七ノ八ノ九ノ十ノ十一ノ十二ノ十三ノ十四ノ十五ノ十六ノ十七ノ十八ノ十九ノ二十ノ二十一ノ二十二ノ二十三ノ二十四ノ二十五ノ二十六ノ二十七ノ二十八ノ二十九ノ三十ノ三十一ノ三十二ノ三十三ノ三十四ノ三十五ノ三十六ノ三十七ノ三十八ノ三十九ノ四十ノ四十一ノ四十二ノ四十三ノ四十四ノ四十五ノ四十六ノ四十七ノ四十八ノ四十九ノ五十ノ五十一ノ五十二ノ五十三ノ五十四ノ五十五ノ五十六ノ五十七ノ五十八ノ五十九ノ六十ノ六十一ノ六十二ノ六十三ノ六十四ノ六十五ノ六十六ノ六十七ノ六十八ノ六十九ノ七十ノ七十一ノ七十二ノ七十三ノ七十四ノ七十五ノ七十六ノ七十七ノ七十八ノ七十九ノ八十ノ八十一ノ八十二ノ八十三ノ八十四ノ八十五ノ八十六ノ八十七ノ八十八ノ八十九ノ九十ノ九十一ノ九十二ノ九十三ノ九十四ノ九十五ノ九十六ノ九十七ノ九十八ノ九十九ノ百

無書トハ此ノ謂ナリ又附子石膏人參大黃ノ四品ハ性味功能ノ別ナルトハ童子モ皆能知ル所ナレモ今日其症ニ對シテ迷惑セズ速カニ能用分ケテ機ヲ誤マラザル者ハ真ノ國手ナリ予モ年來苦心スル所ニシテ近頃口漸ク其機ヲ誤マラザルニ似タリ學者ソレ勉メヨヤ

○醫術ト射術ト同様ナルモノニテ先年モ同藩ノ師範家高久生ノ多ク門弟ヲ伴ナヒ郊外ニ出デ、大的ヲ射ルヲ觀ルニ始メ四矢セシニ二筋ハ正中ヲ貫スキ二筋ハ羽當リシテ過ケリ其後

ハ百發百中シテ一筋モ外スル無カリシハ真ノ射手ナリ又其頃口殊ニ未熟ナル何甚ハ始メ四矢ノ内ニテ三筋ハ的ニ當リ一筋ハ的ヨリ二間バカリモ外レヌ其後ハ只ノ一筋モ當ラズシテ皆的ヨリ二三間モ脇ニ射外セリ始メ三筋ノ當リシ寸ハ先生ヨリモ上手ノ様ニ見ヘシガ其餘ハ悉ク的ヲ外シテ當ルコトノ無カリシハ二筋ノ矢ハ偶中ニテグアリケル醫者モ上手ニ成レバ縦ヒ見違ヒアリテモ的ヨリ遠ク出ルコト無カルベシ下手ハ間ニ手柄スルコトアリテモ皆偶中ニ

醫聖堂雜言

刀編

大ノ重徳園藏

シテ二ノ矢ハ的ヲ外シテ二三間ヨリ七八間モ  
 脇ヘ行勝チナラシ危キコトニ非ズヤ  
 ○今日人ノ死生ヲ見分ルコト肝要ナレバ兎角見  
 ヘヌモノニテ老人ト小兒トハ猶更見分テ難キ  
 モノナリ然レバ其見分テ難キモノ見ヘヌモノ  
 ト片付ケ置テハスマヌナリ故ニ古人モ死生ヲ  
 知ルヲ第一トス其死生ヲ知ツテ生クベキヲ生  
 カスヲ醫者ノ業トス其死生モ知ラズニ妄リニ  
 藥ヲ與フルハ暗夜ニ鐵砲ヲ放ツニ異ナラズ常  
 ニ心ヲ用ヒテ死生ヲ知ルヲ要務トスベシ死生

ヲ知ラザレバ療治ハ手ニ入ラヌモノト心得ベ  
 シ其死生ヲ知ルハ素問曰切脈動靜而視精明察  
 五色觀五藏有餘不足六府強弱形之盛衰以此參  
 伍決死生之分ト脈ト五色ヲ參考シテ決スルコ  
 ナレバ脈ヲ第一トス其第一トスル所ハ寸口ニ  
 テ胃氣ヲ候フヲ云ナリ故ニ又曰胃者水穀之海  
 六府之大源也五味入口藏於胃以養五藏氣而變  
 見於氣口ト又曰胃者平人之常氣也人無胃氣曰  
 逆逆者死ト氣口ハ即寸口ナリ十二經脈ノ大要  
 會ニシテ此胃氣ノ脈ノ寸口ニ朝スル摸樣ト其

力神ノ有無トヲ診察シテ死生ヲ決知スルナリ  
 其力神ノ有ルヲ以テ生クトシ無キヲ以テ死ト  
 ス其胃氣ノ脈ノ摸様ト云ハ李挺曰胃氣者中氣  
 也不大不細不長不短不浮不沉不滑不澀應手冲  
 和難以名狀者為胃氣有胃氣則有力有力則有神  
 無胃氣則無力無力則無神有神則生無神則死ト  
 是ナリ人ハ胃氣ヲ以テ本トスルナレバ假令ヒ  
 今日無病ニテ大丈夫ナル人ノ様ニ見ヘテ何脈  
 ガ搏テモ其中ニ此胃氣ハ力神ガ無ケレバ皆死  
 脈ニテ必ス頓死スルナリ又極老人ノ久シク病

ンデ床ニ卧シ數日不食シテ今モ知レ又様子ニ  
 見ヘテモ脈ニ此胃氣ノ力神ノ有ル内ハ決シテ  
 死ナヌモノナリ故ニ此力神ノ有無ヲ取覺ユル  
 ヲ要トス然レバ輒スクハ知レ又ナリ精シクハ  
 予ガ著ハス所ノ療治樞要ニ詳カナリ初學ノ者  
 ハ常ニ自カラ心ヲ静カニシテ外意ヲ忘レ呼吸  
 ノ定メテ毎日平旦ト食ノ前後トニ時々ノ已ガ  
 脈ニテ考ヘ取覺ユルト自然ニ知レルモノナリ  
 又小兒ハ三四歳マデモ三部ノ脈ニテハ知レ又  
 モノニテ虎口ニ闕ノ色脈ヲ見テ知ル丁定法ナ

リ然ルニ近來ノ醫者ハ知ラザルニヤ吟味スル  
 ハ少ナシ何ヲ以テ定規トシ治療ヲ為スニヤ太  
 甚訝カシ五色ノ辨ハ予ガ醫門天眼鏡ニ詳ニス  
 ○孟子曰胸中正則眸子瞭焉胸中不正則眸子眊  
 焉聽其言也觀其眸子人焉廋哉ト誠ナル哉此言  
 ヤ吾先師今大路道ニ先生モ眼精ノ見様肝要ナ  
 リト説レタリ故ニ吾門常ニ病客ノ眼精ヲ見テ  
 以テ邪正虚實ヲ察スルノ機關トス然レモ其神  
 彩精光ヲ見分ルト脉ノカ神ヲ診察スルトニ至  
 ツテハ唯黙シテ心識ニ在ルノミ言以テ傳ヘ難

ク筆以テ授ケ難シ各心ヲ用ヒ親シク病客ニ就  
 テ自カラ得ルニ在リ

○人壽百歲猶保ツベシ延壽書曰人者物之靈也

壽本四萬三千二百餘日ト即一百二十歳ナリ然

ルニ世俗ハ人生五十又五歳ヲ定命ナリト云フ

蓋シ易曰天數二十有五地數三十凡天地之數五

十有五ト此ニ本ツキ天地ノ數ノ誥リナレバ斯

ハ言ナランカ天地ノ數ハ終テ復始リ環ノ端ナ

キガ如シ豈天壽ニ疆リアラシヤ然レモ人ノ二

十有五歳ト三十歳ト五十有五歳トノ關々ハ太

甚超惡キ所ニテ動モスレバ前後ノ坂ニ蹶キ斃ル者多シ其關々ヲ難ナク超レバ漸々ニ無窮ノ壽域ニ躋ルベシ素問曰上古之人其知道者法於陰陽和於術數飲食有節起居有常不妄作勞故能形與神俱而盡終其天年度百歲乃去今時之人則不然以酒為漿以妄為常醉以入房以慾竭其精以耗散其真不知持滿不時御神務快其心逆於生樂起居無節故半百而衰也ト又家語ニ孔子曰人有三死而非命也已自取也夫寢所不時飲食不節逸勞過度者疾共殺之ト吾人共ニ自カラ養生ノ

道ヲ失フガ故ニ天壽ノ百歲ヲ度ルヲ能ハズシテ皆中道ニ斃ル所以ナリ慎マズレバアルベカラズ時ニ予此頃口長生養壽ノ妙灸一法ヲ得タリ資生經云有人老而顏如童子者蓋每歲以鼠糞灸臍中一壯故也又本草彙言云本朝韓雍侍郎討大藤峽獲一賊年逾百歲而甚壯健問其由曰少時多病遇一異人教令每歲灸臍中自後康健ト蓋レ人ノ臍ハ生ヲ受ルノ始メ父母ノ精血俱ニ凝結シテ根ガス所ニシテ花菓ノ枝ニ在ツテ蒂ニ通ズルガ如ク胞胎ノ内ニ在ツテハ母ノ呼吸ニ

隨ヒ生レ出ツルニ及シテハ真靈ノ氣ハ臍下丹  
 田氣海ニ聚リ呼吸ハ口鼻ヨリス實ニ人身ノ本  
 蒂ナリ是ヲ以テ神闕ト名ヅク灸火ヲ用ヒ温煖  
 ナラシムル寸ハ正陽ノ氣ヲ保護シテ全體自カ  
 ラ壯健ニ無病長生スルノ理ナリ唐書云柳公度  
 八十九歳或問之曰吾不以脾胃煖冷物熟生物不  
 以元氣佐喜怒氣海常温耳ト是灸火ヲ用ヒザレ  
 疋實ニ養生ノ道ヲ自得スル人ナリ予ヤ柳公度  
 ヲ學ヒ難シ故ニ先ツ二子ニ倣ヒ毎月熟艾ヲ小  
 麥ノ大サニシテ臍中ニ一二壯ヅ、灸シ試ミル

ニ何トナク意快然タリ因テ本鐸シテ多ク人ニ  
 モ勸メ灸セシムルニ皆自カラ凡ナラザル様ニ  
 覺ユト告グ臍中ノ深キ者ニハ鼠糞ノ兩頭尖ナ  
 ル者ヲ碎末シ埋入レテ其上ヨリ二三壯灸セシ  
 ム此法ハ下元虚寒臍腹冷痛遺精白濁小便頻數  
 遺尿不禁大便久瀉疝痢脱肛婦人ハ赤白帶下經  
 水不調等ノ症ニハ三日ニ一次灸スベシ極メテ  
 殊効アラレ又其鼠糞ヲ用ユルモノハ能灸火ヲ  
 引テ内ニ透徹セシムル切アルヲ以テナリ李挺  
 ガ醫學入門王璽ガ醫林集要ニモ温臍ノ灸藥數

方アレバ予未ダ試ミズ  
 ○大人小兒ノ諸病ニ脉症ノ相對セザルニ痧毒  
 ト虻蟲トノ所爲ナルモノ多シ心ヲ用ヒテ吟味  
 スベシ此ニ症ハ兎角何病ニモ指<sub>レ</sub>出ルモノニテ  
 種々無量ノ症候ヲ見ハスモノナリ其症ヲ見付  
 ケテ其症ヲ先ヅ治スルト本病モ亦續ヒテ愈エ  
 ルコトアリ其痧毒ト云ハ血ガ邪熱ノ爲メニ絡中  
 ニ鬱滯シテ順行スルコト能ハズ瘀血ト成リ瘀毒  
 ト成ルナリ鉞鍼ニテ放發スルニアラズンバ速  
 功ヲ得ガタシ郭志遠始メテ專ラ此術ヲ行ヒ其

効アルヲ以テ名高ク一家ヲ成シテ痧脹玉衡ヲ  
 著ハセリ其症急卒ノ病ニ多シ本朝東武ノ方言  
 ハヤウチカタ越前海濱ノ方言バイ美濃山中ノ  
 方言マメカト云モ皆是痧病ノ類ナリ山民急  
 卒ノ病ヲ發スレバ直ニ生豆ヲ與ヘ嚙セ試ミル  
 ニ臊味ナキヲ以テ名ヅクト此三症ヲ療ズルヲ  
 聞クニ東武ニテハ直ニ肩脊ヲ刺シ越前ニテハ  
 下脣ノ裡ヲ刺シ美濃ニテハ足ノ拇指ヲ刺シテ  
 血ヲ取り血出ヅレハ治シ若シ血出デザレバ治  
 セズト云フ偕其痧毒ハ多ク尺澤委中ニ見ハル

龔廷賢云青筋症北人多多患之是十有青筋モ  
 アレモ予毎ニ試ミルニ紅紫黒ノ細筋アリ肩背  
 ニ見ハルハ多クハ細點ナリ皆肌表ニ見ハル  
 レモ亦深ク皮下ニ隠レテ見ハレザルアリ能々  
 吟味セザレバ知レ難シ其尺澤委中ヲ刺セバ毒  
 血一升餘モ送出ヅルナリ駭クベカラズ自然  
 ニ止ルナリ或ハ暈眩レテ卒倒レ嘔吐昏絶スル  
 ニ至ル者アリ早ク新汲ノ冷水一碗ヲ與ヘテ平  
 卧セシムベシ須臾ニ醒ルナリ若シ誤ツテ經脉  
 ヲ刺セバ一身ノ血出テ盡テ止マラズ者々斃レ

テ終ニ救フベカラザルニ至ル慎マズンバアル  
 ベカラズ故ニ刺法ニ至テハ善師ニ就テ學ブベ  
 シ面接ロ授ニアラザレバ傳ヘ難シ又其蛇蟲ト  
 云ハ九蟲ノ一ニシテ楊仁齋云食蟲ナリ一切飲  
 食ヨリ化生スルナリ其蟲ノ生ズルヤ張介賓云  
 凡藏強氣強者未聞有蟲正以隨食隨化蟲自難存  
 而蟲能為患者終是藏氣之弱行化之遲所以停聚  
 而漸致生蟲耳ト藏氣ノ弱者ハ飲食ヲ一時ニ消  
 化スルナリ能ハザルカ故ニ濕熱熏蒸シテ腐壞シ  
 終ニ蟲ト成リ腸胃ノ間ニ變動シテ種々ノ怪症

ヲ見ハスモノナリ腹候ト脈診トニ熟セザレバ  
 知リ難シ偕其食蟲ヲ除去シニハ殺蟲ノ品多シ  
 ト雖モ鷓鴣菜ニアラザレバ盡ク除去ルヲ能ハ  
 ズ其他ハ皆是敵ヲ切カス奇兵ノ士ノミ鷓鴣菜  
 ニ至ツテハ實ニ草ヲ刈リ地ヲ拂ツテ追討スル  
 ノ大將ニシテ虻家一日モ無クシバアルベカラ  
 ザル物ナリ然レモ漢土ニハ無キニヤ本草綱目  
 ニ此菜ヲ載セズ故ニ先輩ハ是ヲ船底苔ニ充ツ  
 船底苔ハ本草綱目ニ治鼻洪吐血淋疾解天行熱  
 毒伏熱頭目不清神志昏塞及諸大毒トアリ予此

諸症ニ鷓鴣菜ヲ用ヒ試立ルニ往々効アリ船底  
 苔ハ未ダ虻家ニ試ミザル所ナリ一日門入宛馬  
 前坂村ニ住ス宮内忠宅ト云モノ来リ鷓鴣菜ヲ  
 用ヒテ虻ヲ下セバ復生ズルト早ク他藥ヲ用ヒ  
 テ下セバ復生ズルト遅ク爾カモ亦少ナシト云  
 フ予ガ曰ク然ラズ虻ハ藏氣ノ弱キヨ非生ズ汝  
 ハ鷓鴣菜ヲ用ヒテ虻ヲ下スコトヲ知レモ後ニ藏  
 氣ヲ調理スルトヲ知ラザルガ故ニ藏氣愈弱シ  
 テ飲食ヲ消化スルト愈遅ク虻ノ生ズルト復愈  
 早ク愈多シ他藥ヲ用ヒテ下セバ復生ズルト遅

夕爾カモ亦少ナシト思フハ非ナリ虻ヲ下スニ  
 他藥ノカニテハ敵シ難シ初メテ用ユル寸ハ劫  
 カサレテ二三條ハ下ル凡虻族ヲ平ラグルノ品  
 ニアラザレバ皆遯レ匿レテ其鋒先ヲ避レバナ  
 リ若シ他藥ヲ用ヒテ下ラザル寸鵠鵠菜ヲ大劑  
 ニシテ與ヘ試ミルベシ虻アレバ必下ルベシト  
 諭シケレバ後又來ツテ謝シテ曰ク果シテ師ノ  
 教ノ如シト予ガ常ニ虻ヲ下スヤ鵠鵠菜ヲ大劑  
 ニシテ數服セシメ虻族ヲ咸ク平定シテ後必ズ  
 藏氣ヲ調理スルヲ以テ重テ甘肥生冷等ノ物ヲ

過食スルニ非ザレバ復生ズルヲ無シ

寸白蟲モ亦九蟲ノ一ナリ豚兒宗英ハ圍ニ登

ル毎ニ寸白蟲ヲ下ス一三四年バカリ太甚シキ

寸ハ心腹刺痛シテ四肢厥逆シ面脣色ヲ失シ脉

沈細ニシテ將ニ絶セルトスル状ノ如クト多シ

常ニ衛生寶鑑ニ出ツ常歸四逆湯ニ吳茱萸ヲ加

ヘテ服用シ間ニ自カラ諸書ノ寸白蟲ヲ治スル

奇藥奇方ヲ撰ンデ屢試ミルト雖モ更ニ寸効ナ

ク技窮マル一々同藩ノ友人鈴木生ノ雜話ニ寸

白蟲ノ變ジテ人ニ化シタルニ胡桃肉ヲ出シテ

勸メケレバ衣冠ノ云残りテ全身ノ消失セシト  
 ヲ書タル草雙紙ヲ見タリト語ルヲ聞テ即試  
 ニ五六枚ヲ食ヒシニ妙ナル哉翼朝ニ至リテ圍  
 ニ登ルニ寸白蟲ハ下ラズシテ太便ハ平ヨリモ  
 軟カニ刺痛モ大半ヲ減ズ初メテ知ル胡桃肉ノ  
 寸白蟲ヲ化シテ水ト為ストヲ今ニ至ルマテ時  
 時食フニヤ絶テ寸白蟲ノ下ルト無ク刺痛モ止  
 ミ又由テ思フ僅カニ兒女ノ慰ニニ書ケル草雙  
 紙ノ中ニスラスノ如キノ奇方アリ今日雜書ト  
 雖也亦等閑ニ看過スベカラズ諸事ニ心ヲ用ヒ

治療ノ助ケト成ラシトハ冊子ヲ作りテ書留メ  
 置クベキナリ然レモ常ニ奇藥奇方ノ云ヲ好シ  
 テ用ユル者ヲバ妙藥使ヒト呼ビテ太甚陋シム  
 所ナリ又醫書ハ假名ニテ書タル中ニハ深切ナ  
 ルト多シ然ルニ此書ハ假名書ナリ取ニ足ラズ  
 ト惡見識ヲ立ル徒アリ大ナル誤リナリ漢人ハ  
 漢字漢文ニテ非ザレバ通用セズ我朝ニテハ萬  
 事假名ノ四十八字ニテ濟ムトナリ漢人ニ示ス  
 書ニモアラヌヲ高慢ニ漢文ニ書タリモ意ヲ盡  
 スト能ハザルノ云ナラズ却ツテ齟齬スルトア

リ假名ニテ書ケバ方言ニテモ思フ様ニ書取ラ  
レ見ル人モ亦知リ易シ故ニ假名書ノ中ニハ治  
療ニ益アルコト多シ

○世ニ勞瘵ヲ治スト云者アリ勞瘵ハ治スベカ  
ラズ皆似テ非ナルモノナリ世醫ノ勞瘵ト云ハ  
蓋シ多ク外邪ノ熱ガ久シク解セズシテ持分ノ  
積氣ニカラミ日數ヲ經テ次第ニ羸瘦シテ咳嗽  
吐痰徃來寒熱盜汗等ノ症ヲ見ハシ勞瘵ニ紛レ  
ルモノナリ不吟味ノ醫者ハ勞瘵ナリト早合點  
シテ滋陰降火湯ヲドヲ投ジテ却ツテ大病ニ仕

立ウル者ナリ病家ハ醫ノ言ヲ信ジテ其取扱ヒ  
ニスル故ニ病人モ自カラ起ツコト能ハスト覺悟  
シテ元氣モ日々ニ衰ヘ終ニ救フベカラザルニ  
至ル者多シ歎ズベキニ非ズヤ先年モ本町ニテ  
一商家何屋某ト云モノ年三十八九バカリ前症  
ヲ患フ衆醫皆勞瘵ナリトシテ藥ヲ與フ予獨リ  
勞瘵ニ非ズト言ト雖モ舉家皆信ゼズ其藥ヲ服  
セシメテ終ニ死ス其妻モ亦同症ニテ死ス凡テ  
其家ノ兄弟六人皆同症ヲ患ヘ三年ヲ出デズシ  
テ續ヒテ死亡ス故ニ醫俗共ニ猶悟ラズ傳尸病

ナリト心得テ却以テ予が言ヲ嘲リ毀ルヲ聞ケ  
 リ又七人メニ當リテ其家ニ嫡女ニ十三四歳ナ  
 ルガ同症ヲ患フ其親戚ニ六間町ニ何屋某ト云  
 者ノ母ハ女ノ外祖母ナリ自カラ歎來ツテ予ニ  
 請テ云フ此女モシ死セバ次女アレバ幼稚ニシ  
 テ家ノ祭リヲ絶シ願ハクハ國手ヲ勞シテ救ヒ  
 タマヘト予ガ曰ク前ニ死セル六人モ予ガ言ヲ  
 信ゼザレバナリ故ニ不信ノ家ニ入ツテ治ヲ施  
 スヲ好マズ實ニ救ハシト欲セバ汝ガ家ニ迎  
 來タレト答ケレバ其夜病女ヲ迎取り再來ツテ

診ヲ請フ予往テ診ズルニ前症悉ク具ハリ加<sup>カ</sup>梅<sup>ク</sup>  
 痰中ニ血ヲ帶ルヲ見ル始メ死セル六人ト同症  
 ニシテ皆必死トス予乃チ脊ニ十七點ヲ下シテ  
 日々灸セシメ始終主方ハ小菟胡湯ニ増減シテ  
 與フルト三月許ニシテ平愈ス此傳尸ニ非ザル  
 所以ナリ其女今巳ニ壻ヲ迎ヘ家名ヲ相續シテ  
 ニ子ヲ生メリ又予ガ家ニ勞瘵蟲ヲ取ノ奇方ア  
 リ天徳丸ト名ヅク猪牙皂莢ノ不<sup>レ</sup>蛀<sup>マ</sup>モノ蜜ヲ塗  
 テ炙リ桃仁ノ皮ヲ去テ炒リ太黃阿魏雷丸檳榔  
 子安息香右七味各等分細末ト為シ天徳日ノ平

且ニ東方ニ向ヒ修合シテ糊ニテ赤小豆ノ大サ  
 ニ丸ジ月ノ初旬ニ桃柳梅李石榴ノ五木東引ノ  
 細枝各七莖長サ三寸ヅ、藍葉七枚葱白根共ニ  
 三莖青蒿苦楝根白皮甘草各三錢ヲ細カニ剉ミ  
 無病ノ童便四合ヲ以テ男患バ女煎シ女患バ男  
 煎ジテ二合ヲ取り二服ニ分チ先ツ一合ヲ用ヒ  
 テ五更ニ三五十九ヲ送下ス服後ニ若シ吐セシ  
 ト欲セバ白梅ヲ含ムベシ天明ニ至リ黃黑水ヲ  
 下シテ其中ニ必ズ勞蟲アリ子細ニ吟味スベシ  
 若シ未ダ下ラズレバ早朝空心ニ再下スベシ若

シ瀉下シテ止マズンバ龍骨黃連ニ味ノ末各一  
 錢半ヲ白水ニ調服シテ白粥ニテ補フベシ予モ  
 僅カニ二人ヲ試ミシニ一人ハ促織ノ如キ蟲ニ  
 箇ヲ下シ一人ハ亂髮ノ如キ蟲數十條ヲ下セリ  
 然レモ二人共ニ終ニ死セシガ根ヲ斷シニヤ其  
 家ニ復有ルヲ聞カズ偕又勞瘵ニ似タル者ヲ  
 治セシ一ハ數十人ニ及ベモ真ノ勞瘵ニ至ツテ  
 ハ實ニ治スベカラズ故ニ字ニ於テ祭ニ從フナ

凡テ衛氣ノ外ニ固カラザル人ハ常ニ風邪ニ

胃サレ易ク其引時ヲ覺ユルモノナリ予胎息ノ  
 法ニ倣ヒ考ヘテ一法ヲ工夫セリ先ツ其時ニ臨  
 ンデ正坐シ腰ヲ伸シ腹ヲ張リ仰ラ向キ口ヲ閉ヒ  
 テ大ニ空氣ヲ吸テ腹中ニ達スルヲ三口ニシテ  
 微々細々ニ息ヲ為ベシ必慎ンテ急ニ大ニ吐キ出  
 スベカラズ却ツテ元氣ヲ傷ル斯ノ如クスルヲ  
 凡テ三遍ナリ初メテ此法ヲ行フ寸ハ心神惱亂  
 スルガ如クニシテ背脊皆熱スルヲ覺ユ是乃  
 陽氣ノ肌表ニ達シテ邪氣ノ散ズル兆ナリ又引  
 テ後モ屢ハ此法ヲ行ヘバ重キハ輕ク輕キハ早

ク發散シテ治スルナリ故ニ平生此法ヲ寢席ニ  
 在ツテ起卧ノ時ニ全身仰ラ向キニ成リ兩足ヲ齊  
 シク伸シテ懈怠ナク行フ寸ハ神氣内ニ充滿シ  
 陽氣外ニ堅固ニシテ百邪襲フヲ無ク長生無病  
 ニシテ安全タルベシ其法ニ馴ル、寸ハ苦惱ナ  
 ク行ヒ易シ予毎ニ試ミル所ナリ

○人常ニ寒ヲ怯テ夏月炎暑ノ時ト雖モ復衣シ  
 テ自カラ室ヲ圍ヒ被衾ヲ纏覆テ飲食故ノ如ク  
 少シモ透間アレバ直ニ風ヲ引キ藥治スレモ經  
 年愈ガル者アリ伏火ノ症ナリ素問曰諸噤鼓慄

皆屬於火ト又曰正者正治反者反治ト灌水法ニ  
 アラザレバ速巧ヲ得ガタシ其法ヲ行フヤ後漢  
 書云有婦人病經年世謂寒熱注病十一月華陀令  
 坐石槽中平且用冷水灌云當至百始灌七十冷顫  
 欲死灌者懼欲止陀不許灌至八十熱氣乃蒸出囂  
 囂然高二三尺滿百灌乃使然火温床厚覆而卧良  
 久冷汗出以粉撲之而愈又南史云將軍房伯玉服  
 五石散十許劑更患冷疾夏月常複衣徐嗣伯診之  
 曰乃伏熱也須以水發之非冬月不可十一月冰雪  
 大盛時令伯玉解衣坐石上取新汲冷水從頭澆之

盡二十斛口噤氣絕家人啼哭請止嗣伯執搗諫者  
 又盡水百斛伯玉始能動背上彭々有氣俄而起坐  
 云熱不可忍乞冷飲嗣伯以水一升飲之疾遂愈自  
 爾常發熱冬月猶單衫體更肥壯ト此二子ヨリ始  
 ム其十一月ヲ待テ行フモノハ他月ハ陽氣外ニ  
 泄レ十月ハ陽氣内ニ盛シニレテ一陽來復ノ時  
 ニ臨ンテ激發スル寸ハ表達スルト速カナルヲ  
 以テナリ予モ二子ニ倣ヒ治セシトヲ謀レ取  
 テ肯セス已トヲ得ズ越婢湯ヲ作ツテ與ヘ別ニ  
 藥湯ヲ製シ強テ數日浴セシメ漸々ニ圍ヲ解テ

衣ヲ去リ平ニ復スル者三人ニ及ベリ又頭寒ノ  
 ミヲ患テ盛夏ト雖厚履テ去ル一能ハザルモ  
 ノ平旦ニ灌水シテ即日ニ脱却セシメタル者多  
 シ又癩狂ヲ飛泉ニ打タセテ治スル一アリ極メ  
 テ良効アラレ然レモ予未ダ試ミズ又小兒痘瘡  
 ノ鬱シテ外ニ發出セズシテ死シ或ハ稠密ニシ  
 テ乾枯シ紫黒倒靨シテ喘死シタル者ニ灌水法  
 ラ行フテ起タシムル一アルハ張子和ガ儒門事  
 親云近年予庄隣沿蔡河來往之舟常艤於此一  
 日舟師偶見敗蒲一束沿流而下漸迫舟次似聞啼聲

而微舟師疑其人也探而出之開視之驚見一兒四  
 五歲許瘡疱周匝密而容隙兩目皎然飢而索食因  
 以粥飽之蓋此言ニ出ツ是亦火毒ナルガ故ニ  
 水ヲ得テ激發シテ活スルナリ予モ先年始メテ  
 此法ヲ鬱シテ外ニ發出セズ死シタルニ行ヒ試  
 シルニ實ニ天命ニヤ起ス一能ハザルノミナラ  
 ズ奇ヲ好ムト彼ノ醫醫等ノ為メニ毀リヲ受ケ  
 タリ假令ヒ千萬人ノ譏リヲ受ルモ何厭ハン勢  
 メテ人ヲ救ハント欲スレモ亦彼ノ頑愚ノ一向  
 宗門ノ徒多ク過去ノ約束ニ決定シテ吾道行ハ

レズ同志ノ君子其勉メヨ  
 ○瘍家ニ人參ヲ用ユル一ヲ禁ズルモノハ素問  
 曰諸痛痒瘡皆屬於心火ト是火毒ヨリ發スルヲ  
 以テナリ若シ誤用ユル寸ハ火毒愈熾ニ内ニ潰  
 ヘテ終ニ斃ル者多シ小兒痘瘡モ火毒ナレバ  
 大人ノ多慾積毒ヨリ發スル癰疽トハ大ニ異ナ  
 リ然レバ人參ヲ用ユル者ハ百人ニ一人モ有ル  
 カ無キカナリ其時ノ場合ト指引ノ塩梅トヲ能  
 能考ヘ見極メテ用ユルガ肝要ナリ若シ誤用ヒ  
 テ斃レザレバ痂落ノ後ニ癰腫ヲ發スルカ又ハ

多ク眼ヲ損ズルモノナリ知ラズレバアルベカ  
 ラズ

○堤公愷ハ予ガ竹馬友ナリシガ先年勤學勉強  
 シテ遂ニ眼疾ヲ患ヒ目珠腫痛シテ忍ブベカラ  
 ズ其赤キヲ緋ノ如シ治ヲ請フ故ニ劉河間云目  
 昧不明目赤腫痛翳膜皆為熱也ノ論ニ從ヒ  
 先ツ清熱劑ヲ投ジテ點服セシムルニ其痛反劇  
 シク將ニ明ヲ失セントス何時カ痛最甚ト問  
 フニ夜ニ至レバ恰モ目珠ヲ鑿ガ如クニシテ痛  
 ミ忍ブベカラズト云フ於是予モ始メテ陰症ナ

ルヲ知リ更ニ四物湯ノ熟地ヲ生地ニ換ヘテ夏  
 枯草香附子ヲ加味シテ與ヘケレバ服後頓ニ痛  
 減シテ諸症モ亦隨テ愈タリ樓全善云夏枯草治  
 目珠疼至夜則甚者神効又用苦寒藥點之反甚者  
 亦神効ト其巧ヲ稱スルト實ニ妄誕ナラズ此症  
 若シ陽症ナリトシテ強テ前藥ヲ施サバ特リ明  
 ヲ失スルノミナラズ命モ亦危カラシ恐ルベキ  
 二非ズヤハ子ハ母ニ似ルカト云フハ非也  
 〇小兒二三歳ヨリ十餘歳マテニ驚風ノ如ク暴  
 カニ口眼相引目睛上視シテ地ニ仆レ手足搐搦

シテ人事ヲ知ラズ仆ル時ニ聲ヲ作シ將ニ省ニト  
 スル時ニ涎沫ヲ吐スル者アリ其儘ニ打捨テ置  
 ベシ必ズ須臾ニ自カラ省ルモノナリ不安内ノ  
 醫者ハ周章テ騷ヒテ頻リニ鍼藥ヲ施シ與ヘテ  
 却ツテ殺ストアルモノナリ素問曰人生而有病  
 巔疾者病名為胎病此得之在母腹中時其母有所  
 大驚氣上而不下精氣並居故令子發為巔疾也ト  
 此胎病ノ癩癩ニシテ深痼難治ノ症ナリ早ク治  
 セザレバ終身ノ病ト成ルト通リハ先ヅ紫圓ヲ  
 用ヒテ下シ後ニ揚士瀛ガ直指方ニ出ヅル至聖

保命丹ニ琥珀龍齒鈔丹ノ三味ヲ等分ニ加ヘテ  
 家方龍虎丸ト名ヅク長服スレバ治スルモノナ  
 リ精クハ後編ニテ語ラレ  
 ○或老人ノ話ニ病人ノ名状ニ難キ症ノ荏苒ト  
 シテ瘥ヘザルニ他人ノ慈念アリテ附著シ惱マ  
 ストモ間アルモノナリ意ヲ付テ見ルベシ其候  
 ハ手指ノ爪甲ニアリ爪先ヲ押見ルニ甲ノ根半  
 分ハ血聚ソテ赤ク先半分ハ血色ナク白ク成ル  
 ハ常ナリ然ルニ先根共ニ一様ノ血色ヲ成シテ  
 全甲ノ赤キハ生靈ナリ亦全甲ノ白キハ死靈ナ

リト云ヘリ千金方ニモ生人瘥死ノ病名モ  
 アレモ予未ダ其症ニ遇ハズ太甚信シ難シト雖  
 モ姑ク記シテ後考ニ備フ  
 ○世ニ狐ノ人ニ憑ルト間アルモノニテ予モ四  
 五人ハ見聞セシガ皆是精神衰乏ノ人ナリ血氣  
 充滿シテ剛強ナル人ニ憑ルトヲ聞カズ又武術  
 巫禱ト雖モ威徳アル人ニ非ザレバ除去ルト能  
 ハズ却ツテ彼ガ朝リヲ受ケシトアルヲ聞ケリ  
 此ニ秘密ノ法アリ丹生郡笹谷村ニ住ス隱醫ニ  
 渡邊應輔ナル者アリテ傳授セシガ未ダ試ミザ

レ也極メテ百發百中ノ神法ナラン先ヅ病人ノ  
 手足ノ拇指ヲ緊ク縛リテ彼ガ去路ヲ止メ足ヨ  
 リ漸々徐々ニ脾樞季肋脇下肩背ノ邊ヲ逆ニ探  
 索メヨ必ズ皮下ニ團々トシテ手毬ノ如キ動塊  
 ナリ鉞鍼ヲ用ヒテ其塊ヲ深ク刺スベシ多クハ  
 未ダ刺ザル前ニ彼自カラ悲哭シテ去レト乞モ  
 ノナリト云ヘリ又野狐ノ人ニ憑ルハ凡テ足ノ  
 太指ノ爪下ヨリ入ルモノニテ若シ山野ヲ遊行  
 スルニ遠ニツトシテ足ノ太指ビクビク動  
 ンアラバ急ニ小刀ヲ以テ刺スベシ立ドコロニ

退治スト云フヲ聞ケリ實ニ然ルニヤ

醫聖堂雜話初編畢

跋曰。醫不三世。不服其藥。以其業之益精也。  
 道忠篠島氏。累世以伎。鳴於本藩者。即其人  
 也。其先宗意。始學醫。有名譽。嘗感日吉山王  
 之靈夢。得神璽爾來。其術愈進。後仕大野先  
 封。松平君。賜秩祿。及居邸。及君徒  
 封于信之松本。致仕留大野。以有先塋之在  
 也。其子宗伯。亦學醫。入于道三。今大路家之  
 門。為久。穎悟才敏。遂受一字。稱道忠。仕

君之令弟大野後主<sub>文一</sub>君為侍醫賜中村里之采地今猶存焉且數有恩賜及公之令嗣<sub>下</sub>君徙封于明石也宗伯已沒其子宗續幼不能從亦留大野及長仕吾<sub>先</sub>公利知君自是之後伯秀叔規宗恕世為本藩之侍醫並字道忠不墮其業今之道忠名宗恕號東廬學方于東都之叔父雨森氏入其室施治屢驗學就還鄉著醫譚若許言在東都之日以家祖之故見明石侯且因先公大祭

賜時服尋其舊也又謁見雲州侯之支封志摩公可謂<sub>君</sub>之餘慶也雨森氏者余先人宗信清堂之門人而好方伎至妙處是以先人盡授禁方書併名字與之號宗信以託幼子以故其撫育丁寧至焉宗信後大起門戶為本藩侍醫無嗣養篠島宗續之次子以為後亦號宗信又無嗣取其家姪井規之弟宗真為後即東廬之叔父也是以與余為數世之通家東廬有子名宗英字道伯今茲乙

未秋欲刻家父之醫談請余一言余固不知其道何以贅之而以祖先之舊不得辭唯書其家系所由以塞其責云爾

天保乙未秋九月 大野藩士石川清弼識

松嵐齋札幹暢書



